

健康メモ

最近のB型慢性肝炎治療

広島市医師会理事
古川 医院 大谷 博正

B型慢性肝炎

治療は、最近、
内服の抗ウイルス
剤を含めた治
療ができるよう
になって、また検査面でもウイルス
量のHBVリアル核酸定量検査が可
能となり、着実に進歩を遂げてきて
おります。B型肝炎で以前、日本に
多かったのは、輸血による水平感染
と出産時の母子間垂直感染でした。
しかし、周産期医療の改善や、ワク
チン投与で垂直感染は激減しており
ます。最近では検査技術の進歩もあつ



て、輸血での感染も、ほぼ無くなつております。ところが、エイズ等と同様に、性行為等による外国産のB型肝炎ウイルスの水平感染が増加しているようです。そのタイプは慢性化することが従来のものより多いといわれています。B型慢性肝炎で問題になるのは、C型慢性肝炎のように経過が長く、肝硬変に近くなつてから肝癌が出てくるのでなく、また、肝炎が進行していない時期に急に肝癌ができる点です。従つてB型慢性肝炎では、肝機能の変動によらず肝癌への注意が必要です。定期的に腹部のCTや超音波検査等によるチェックが必要です。治療は、若い人にはインターフェロンも使用されますが、DNAウイルスであるB型肝炎ウイルスは、RNAウイルスであるC型肝炎ウイルスと違い、肝臓からのウイルス排除はできません。最近の抗ウイルス薬の進歩で、ラミブジ

ン、アデホビル、エンテカビル等が使えるようになり、肝硬変にならずにすむ治療が可能になりました。今まで進行した慢性肝炎は元には戻らないとされていましたが、組織学的にもステージの改善が期待できることがわかってきます。ウイルスを測定限界以下に抑えることが可能となりました。しかしこれらの抗ウイルス薬でも長期に投与を継続するため、経過中にウイルスの変異株の出現により、効果がなくなることもあります。避妊を必要とするため、子供をこれから作る若い人には使いづらいなどの問題点もあります。また、これらの抗ウイルス薬でもウイルスを完全に排除したり、肝癌発症を抑制することはできないことが報告されております。定期的検診が重要です。